

教員
インタビュー

京都大学公共政策大学院

岡敏弘教授

—大学入学までの経歴を教えてください。

広島県生まれ、岡山県育ちです。

中学3年生のときに朝日新聞に連載されていた有吉佐和子『複合汚染』を読んで生活の全部が汚染されているのかと思っていました。

—なぜ理系ではなく経済学にしたのですか。

当時は色覚異常があると理系は勧めないという雰囲気がありました。あの立花隆もそのような指導を受けたらしいですね。彼の場合は文学青年だったわけですが、私は小説をあまり読んでいませんで

した。それでも社会科学には強い関心がありました。高校世界史の教科書も、歴史に法則があるという視点で書かれているように感じ、その基礎に経済があるのなら経済の法則を解き明かしたいと考えて経済学部を選びました。当時の経済学は近代経済学（近経）とマルクス経済学（マル経）に分かれていて、環境問題を明示的に扱っているのは後者だったので、マル経の伝統がある京大を受験しました。

—京大ではどんな生活を送りましたか。

まず、体育会のソフトボール部に入りました。それまではスポー

ツで上達する実感を持った経験がなくてソフトボールなら大学から始める人ばかりなのでビハインドも少なく上手になった実感も得られるのではないかと考えました。入ってみると、チーム数が少ないので全国大会にも出場することができましたし居心地も非常に良かったですね。

—学業はどうでしたか。

当時の経済学部では共産党系と新左翼系の団体がそれぞれ自主ゼミを通じて新入生をオルグしていました。私はたまたま共産党系の自主ゼミに入り、院生のチューター1人と同期6人くらいで勉強会を

始めました。まずはアダム・スミス『国富論』、それが終わるとマルクス『資本論』を読みました。2回生ではケインズ『一般理論』を読みました。マルクスは全てが本のなかに書いてあるので丹念に紐解けば初学者でも理解することができます。それに対してケインズは一読で理解するのは難しいですね。私も後になってようやく分かりました。こういう生活をしていたので、授業にはあまり出席しませんでしたね。

—印象に残った授業はありますか。

2回生のときに受講した、宮本憲一先生の財政学の授業ですね。

宮本先生はマル経の立場から環境経済学を研究していました。宮本先生の主張では、公害は「現代の貧困」です。資本主義社会は、生活手段としての社会資本をケチる傾向があり、それが公害を引き起こしていると言います。しかし、そうであれば資本の論理を排除すれば公害は乗り越えられるということになりますよね。私は、文明社会自体が根本的な問題をはらんでいるという感覚を持っていたので、宮本先生の考えに完全には納得できませんでした。また、新古典派の環境問題の捉え方にも共感できませんでした。新古典派によれば、公害は外部不経済の一例であって、うまく価格をつければ解決するということです。それは違うだろうと思いました。

3 回生になると、ようやく「公害は文明の根本的な病だ」とする経済学に出会いました。それがエントロピー経済学です。当時は経済学部の自治会が集中講義を企画

することができました。それで室田武先生の「エネルギーとエントロピーの経済学」という授業が開講され、私は夢中になって受講しました。エントロピー経済学によると、生きとし生けるものは低エントロピー資源を消費して活動しています。閉鎖系は増大したエントロピーによって行き詰まりますが、余剰分を外に捨てることで活動を続けられます。その捨て場が枯渇すると公害が発生するという解釈です。宇宙に廃棄できれば問題ありませんし、自然に還しても生態系が処理できればそれで良いのです。

—就職活動はしましたか。

公務員になって環境庁（現：環境省）にでも入ろうと思って国家公務員試験の模試を受けたこともありましたが、しかし、4 回生のときに一般教養科目の「自然科学 1 ゼミ」という、反公害・反農薬・

反原発などの活動に取り組んでいる「万年助手」の教員が担当していた授業をとったことをきっかけに私は社会運動にコミットするようになりました。とりわけ 4 年生の冬に出会った「使い捨て時代を考える会」の活動に熱心に取り組み、そうしているうちに大学院に行くしかないと思うようになりました。こうして 4 回生になってから大学院進学を考え始め、最初の試験に落ちて 1 年の浪人を経たあと、ようやく合格することができました。

—大学院に進学してからエントロピー経済学を学ばれていたのですか。

そうです。エントロピー学会は設立当初からのメンバーでした。資本主義か社会主義か、という議論ではなくて、近代文明それ自体を問題にするところに深く感銘を受けました。最近では「循環社会」

という言葉をよく耳にしますが、その源流と言っても良いかもしれませんが、「循環社会」は開放定常系のことです。外にゴミを捨てられるのが「開放」の意味です。それに対して、「定常」というのは、ぐるぐる回って動いているということです。「定常」はエントロピー論の言葉ですが、塩沢由典先生が用いていた言葉でもあります。エントロピー論の「定常」と塩沢先生の「定常」の関係を考察したのが私の修士論文です。

—その後、塩沢先生に指導を受けたことはありますか。

私が院生になった頃に塩沢先生の自主ゼミがあつて、スラッファが好きな人たちが集まっていました。塩沢先生の本では『近代経済学の反省』というのが反均衡、すなわち「定常」の理論を提示していて、大きな影響を受けました。

「なぜ「定常」の理論に惹かれたのですか。」

それが正しいからです。実際の生産者は、需給均衡で価格を決めていますよね。生産者が決めた価格で、売れるだけ売っているのが現実でしょう。不況になったら値段が下がるというものではありません。

「現在の専門は厚生経済学かと思うのですが、それに至る経緯はどのようなものですか。」

博士課程に進学したときに、農業経済学の先生を離れて、着任したばかりの伊東光晴先生に出会いました。修士論文を送付して指導を依頼したところ、二つのアドバイスが返ってきました。一つ目は「アメリカ物理学会報告の熱力学第二法則効率をチェックしなさい」というもの。調べてみると「質の良いエネルギーは、エネルギーの

質が重要なところで使いなさい」という内容でした。ヒートポンプを正当化する論理ですね。そして二つ目は「もともと本流の経済学をやりなさい」というもの。要はマーシャル、ピグー、ケインズと連なるケンブリッジ経済学です。こういう指導を受けたにもかかわらず、結局は博士課程でもスラッファとアントロピー経済学ばかりやっていました。「経済セミナー」に「スラッフィアン経済学入門」という連載をしていたのもこの頃です。

博士課程を終えると、運良く琵琶湖研究所にポストを得ることができました。そこで費用便益分析を研究する必要に迫られ、ミシヤンを勉強し始めました。彼は新古典派の流れを汲んでいます。緻密な論理展開に基づき、非常に面白い議論をしています。夢中になって読み漁りました。そしてミシヤンをはじめとする現代的な厚生経済学を環境問題にどう適用するか、

というテーマで博士論文を書き上げました。こうして厚生経済学にたどり着いたのです。

「先生にとって恩師とは誰ですか。」

伊東光晴先生、槌田劭先生、塩沢由典先生、中西準子先生の4人です。この4人を真似してきました。槌田先生は先ほど述べた「使い捨て時代を考える会」の創設者です。この方には畑の耕し方を教わりました。塩沢先生には反均衡、定常の考え方を教わりました。伊東先生にはありとあらゆることを教わりました。そして中西先生にはリスク論を教わりました。リスク論とは、有害物質をどこまで許容するかという、新しい安全性の概念です。私が研究していた厚生経済学と相性が良いこともあり、化学物質を減らす政策の評価について共同研究を始めました。琵琶湖研究所にいたときの話です。

「その後、福井に移られましたよね。」

伊東先生は当時、福井県から四年制大学をつくりたいと相談を受けていました。そこで学部を作るための教員を集めた中に、私がいいたということです。研究テーマは変わらずリスク論でした。リスクが減ることと費用がかかることの比較をするだけでなく、リスクの大きさを測るという仕事もしました。例えば損失余命というリスク指標を作りました。これは計算しやすい放射線リスクをベースにした化学物質などにも適用できる健康リスク指標です。

「放射線といえば、先生は学生時代に反原発運動に参加したと聞きました。」

チェルノブイリ原発事故が発生した1986年当時、私は博士課程の学生でした。リスク論を知

らないのですから、「原発は怖い」で思考が止まってしまいうわけですね。よくデモに参加して、三条河原から円山公園のあたりまで歩きました。

―リスク論を研究して原発に対するスタンスは変わりましたか。

リスク論に出会ってからしばらくは原発のことは考えていませんでした。というのも、とても小さな確率でとても大きな被害が出るというのは、リスク論では少し扱いにくいのです。しかし福島第一原発事故が起こってからは、リスク論の立場から発信しなければと思います、食品の安全基準について熱心に発信した記憶があります。除染費用や避難基準についても研究しました。事故が起こった後の放射線被曝リスクへの対処についてはかなりはつきりしたことが言えます。原発そのものについてもリスク論で論じなければなりません

がまだ研究途上です。

―ユニバーシティカレッジにはどのような経緯で行くことになったのでしょうか。

環境経済学者がいて、一つのセンターだったので行きましたが、何もおもしろくなかったです。結局後半は自然史博物館に行つて、植物や昆虫の系統や多様性評価に関する文献を読みあさっていました。その理由は当時、中西さんたちのグループで化学物質のリスク評価を人間の健康への影響から生態系への影響に広げる研究が始まっていた。人間の場合は個体の死亡が問題ですが、生物にとっては絶滅が問題です。それで、絶滅の確率でリスクを評価していくのですが、種によって重みが違うわけですね。その重みづけについて決め手がなかったので、系統樹の長さで図ろうとして、盛んに研究していました。

―先生が研究されてきたスラッファ、ミシヤンなどの研究は今だと異端だとされていますが、現代的な意義はどのようなところにあるとお考えですか。

現代的な意義はともあると思います。主流の経済学は価格を重視していますが、スラッファ体系だと数量調整になるので、現代社会にとって意義があると思います。また、ミシヤンは新厚生経済学に限界があるということを示していると思います。

―ゲーム理論などに基礎を置いた授業が開講されていますが、経済学部のカリキュラムとして、もう少し様々な分野を学んだほうがいいと思いますか。

少なくとも学部時代は学史を勉強したほうがいいです。最初はリカード、マルクスから始めたほう

がいいと思います。

―公共政策大学院の学生がこれから学ぶには何を勉強したらいいですか。

入門書はないと思いますが、先ずはマルクスを勉強したら良いと思います。資本論の1巻だけなら3冊なので読みやすいですよ。1巻でマルクス経済学の基本を理解できます。

―今までの研究で一番達成感を感じたものを教えてください。

それぞれの研究で達成感はあると思います。これまでは面白いことだけをやってきたので、面白くないことはやってきていないです。直近の研究は国際価値論と炭素生産性の研究です。

国際価値論は数量調整で価格調整しない世界で、国際的な価値はどう決まるか。国内は簡単に、技



岡 敏弘
おか としひろ

京都大学公共政策大学院教授。
専門は厚生経済学。
公共政策大学院では必須科目「公共政策論B」のほか、
基本科目「経済政策」やリサーチペーパーの指導も担当。

術の集合が与えられれば、その中で最も有利な技術が一つ決まる。そうすると生産費が確定するので、相対価格が決まる。一方、貿易があると、国毎で賃金は異なるため、需要供給調整が働くかも知れない。もしそれが働かないということが国際関係でも言えれば、反均衡論が補強されます。それを論文として発表しました。

―公共政策論Bを通じて学んでほしいことの狙いなどあれば教えてください。

経済学は理論から政策が生み出されてきたので、学んだ経済理論を政策に役立ててほしいです。

―公共政策大学院生と経済学部生はどのように違いますか。

学部生と比較すると、よく勉強していると思います。公共政策大学院は社会人がいるので、学生にとっては刺激になると思います。

―最後に公共政策大学院生へのメッセージをお願いします。

経済学が誰の役に立つかという
と、それは公共政策を担う人です
よね。経営者や企業に雇われて働

く従業員にはあまり役立たない。一番役立つのは公共政策じゃないですか。それを究極的に支えているのは市民ですが。だから公共政策を勉強するのであれば、経済学を勉強して欲しいと思います。

(インタビュー・
坂倉温、山口玄太郎、岩佐一秀)